

# 体育授業におけるスポーツチャンバラの有効性の検討

岡澤 祥訓・辰巳 喜之  
(奈良教育大学保健体育科教育教室)

竹住 和宏・河野 成伸  
(奈良県北葛城郡王寺町立王寺南中学校)

The effectiveness of Sport-chanbara in Physical education class.

Yoshinori OKAZAWA, Yoshiyuki TATSUMI  
(Department of Physical Education, Nara University of Education)  
Kazuhiro TAKEZUMI, Shigenobu KOUNO  
(Oujiminami Junior High School, O uji)

**要旨：**剣道・ダンスの選択制体育授業においてスポーツチャンバラを取り入れることによる効果をスポーツチャンバラに対するイメージ、体育授業の態度評価、運動有能感の側面から検討した。イメージ、態度評価、運動有能感のすべての側面においてその有効性が検証された。しかし、女子にとっては男子との試合等に少し無理な点があると考えられ、男女共習で実践する場合には工夫が必要であることが明らかになった。

**キーワード：**スポーツチャンバラ、運動有能感

## 1. はじめに

平成元年に文部省より告示された学習指導要領では、体育について「日常生活における適切な体育的活動の実践が促されるとともに、生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎が養われなければならない」<sup>3)</sup>と述べられており、日常生活においても自分の能力・適性などに応じて運動を行うことが推奨されている。このような流れを受けて中学校指導書では『個人差に応じた学習を進めるため、生徒が能力・適性等に応じて、運動領域や運動種目の選択ができるようにする』<sup>2)</sup>と示されているように、個性に応じた学習を行っていく方法として、生徒が自ら種目を選択し実施する選択制を導入している。また、その中で『「武道」の領域については、「柔道」、「剣道」、及び「相撲」の中から選択して指導できるようにする。地域や学校の実態に応じて、「その他の武道」についても弾力的に扱えるようにする』、『「武道」及び「ダンス」については、男女とも選択して履修できるようにする』<sup>2)</sup>と述べている。

文部省武道指導推進校の研究指定を受けた王子南中学校では、上述の選択制体育授業のあり方を探求するために剣道・ダンスの選択制授業に取り組むことになった。選択制授業は、生徒が自ら種目を選択することができるため、運動の自発的・自主的な取り組みが期待できる。しかし、事前の経験が殆ど無く、比較的消極的選択者が多い剣道・ダンスの選択制授業では、選択制を実施しただけで、生徒が主体的・意欲的に授業へ参加できるようになるわけではないと思われる。それゆえ、剣道・ダンスの選択制授業では特に、生徒が意欲的に活動することができるような工

夫が必要であると考えられる。

岡澤ら<sup>4) 7)</sup>並びに岡澤<sup>6)</sup>は生徒が主体的・意欲的に参加するために身体的有能さの認知、統制感、受容感から構成される運動有能感が必要であると主張している。そこで、王子南中学校では剣道・ダンスの選択制授業に取り組むにあたって、生徒の剣道・ダンスの愛好度を把握し実態に即した取り組みを行っていくとともに、生徒自らが意欲的に運動に取り組んでいくことができる授業を目指すために、特に、運動有能感を高めることに着目し、「生徒自らが楽しみ方を創造できる授業のあり方」という主題を設定し研究を進めることにした。

剣道・ダンスの選択制に取り組むにあたっての問題は、剣道・ダンスは生徒にとって比較的愛好度が低い種目であること、剣道は男性的なイメージが強く、ダンスは女性的なイメージが強いことである。それゆえ、剣道・ダンスの選択制授業を実施した場合には、男子が剣道を選択し、女子がダンスを選択する可能性が高いこと、その選択希望者の多くが、嫌いであるが他に選択する種目がないからその種目を選択するという消極的な選択をする生徒が多くなる可能性が高いことが予測される。そこで竹住ら<sup>10)</sup>は、このような予測に検討を加えるために選択希望の実態調査を実施した。結果は女子の剣道選択者が比較的多く、女子の剣道選択希望者は比較的積極的な選択希望であること以外、全て予測を裏付けるものであった。そこで、岡澤ら<sup>5)</sup>はダンスの選択者を増やすためにどのような工夫が可能であるかを検討するために、ダンス種目のイメージに関する調査を行った。その結果、生徒はリズム型のダンスを好む傾向が見られたので、種目選択のためのオリエンテーションでは、リズム型のダンスを中心に、男子も含まれているVTRを用いて、授業ではリズム型のダンスを多く取り入れることを力説した。その結果、男子のダンス選択者を6.7%から25.7%に増やすことができた。

剣道は、「くさい」、「痛い」、「防具をつけるのが面倒くさい」というように、否定的イメージが強い種目である。しかし、これらのイメージを生む要因が、剣道の技や用具に関わるものであることから、固定的なイメージとして定着してしまいがちである。また、ダンスにおいて武井ら<sup>10)</sup>は、「性差に関する伝統的で固定的な社会通念が根底にある」と述べており、男女ともにダンスに対して「女性的な」イメージを持つ傾向があることを明らかにしている。また、その影響を受けて、特に男子はダンスへの参加に対して消極的になってしまうという研究結果<sup>9)</sup>も報告されている。

そこで、剣道・ダンスの愛好度・運動有能感を高める工夫に検討を加えるために、加地ら<sup>11)</sup>は剣道とダンスのイメージ尺度の作成を試みた。

竹住ら<sup>10)</sup>は以上の研究成果を基に剣道に対するイメージを好転させ、意欲的に剣道へ取り組み、運動有能感を感得するために、ソフト竹刀やアルファ面を使用することや教師による積極的なアドバイス等の工夫を取り入れた剣道授業の取り組みを行った。その結果、生徒の剣道に対する否定的なイメージを払拭することができ、剣道授業に対する楽しさを感じさせることができた。しかし、「わかる」「できる」といった思いや運動有能感を高めることができなかつたと報告している。そこで、2年目を迎えた剣道・ダンスの選択制授業においては、2年生の選択授業の種目を剣道・ダンス・スポーツチャンバラに幅を広げた。スポーツチャンバラは、剣道よりも型にはまらず、より打ち合いの楽しさを重視したスポーツであり、より意欲的に取り組むことが可能であると考えたからである。

本研究は運動有能感を高めることを目指して取り組んだスポーツチャンバラ授業の有効性を、イメージ尺度、態度尺度、運動有能感尺度を用いて検討することを目的に行った。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象

1997年度王子南中学校の2年生スポーツチャンバラ選択者、男子37名、女子31名、計68名

### 2.2. 調査内容

岡澤ら<sup>4)</sup>の作成した「運動有能感尺度」12項目、高田ら<sup>6)</sup>が作成した「態度評価」20項目、加地ら<sup>1)</sup>が作成した「剣道のイメージ尺度」15項目をスポーツチャンバラに置き換えた「スポーツチャンバラのイメージ尺度」15項目から成る質問紙を、平成9年10月中旬～11月下旬にかけて単元前後で実施し、その変化を分析することによって有効性の検討を行った。

## 3. 授業の取り組み

### 3.1. オリエンテーション

スポーツチャンバラは、今年度から2年生の選択制授業で導入された種目であるため、昨年度剣道授業を選択していた生徒も、スポーツチャンバラの用具を用いてはいたものの、スポーツチャンバラのルールや試合の仕方などの経験は全くない。また、スポーツチャンバラは近年注目され始めた種目であるため、生徒には馴染みの薄い種目である。したがって、スポーツチャンバラで用いる用具から、基本動作、試合までを分かりやすく解説したVTRを見せることによって、スポーツチャンバラのイメージをつかませ、剣道よりも打ち合いが自由で、打ち合いの楽しさが味わえるスポーツであることを理解させた。

### 3.2. 単元計画

単元計画は図1に示されているようであった。

### 3.3. 統計処理

奈良教育大学情報処理センターのSPSSプログラムパッケージを用いて行なった。

## 4. 結果と考察

### 4.1. 選択状況に関して

スポーツチャンバラを選択した生徒は、男子37名、女子31名で全体の44.2%が選択した。選択理由としては、「楽しそう」・「おもしろそう」・「違う種目に挑戦したい」が約半数を占め、男女ともに、スポーツチャンバラに対する興味が高く、積極的選択である生徒が殆どであった。また、剣道から移行してきた生徒には、竹刀への抵抗感からスポーツチャンバラを選んだという理由も見られた。したがって、スポーツチャンバラを開設することによって、より個に応じた選択が可能になったと考えられる。

### 4.2. 単元前後におけるスポーツチャンバラのイメージの変化に関して

表1は、男女別の単元前後のスポーツチャンバラのイメージの変化を明らかにするために、性

図1 《スポーツチャンバラの学習の単元計画》

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
学習の道筋	特性やねらいを知り進め方を理解できる		(ねらい 1) 基本技能を身につけ、身を守ることの大切さを知ることができる。			(ねらい 2) 対人的技能を身につけ、楽しく打ち合うなかから、護身の技を体得することができる。			(ねらい 3) 技に変化をつけ、得意技を使って試合を楽しむことができる。				
0	◇ビデオ試験、選択分け		・学習内容の確認			・準備運動(ストレッチ体操)							
10	◇アンケートの実施					◇基本動作(面、小手、胴、足、突き)							
20	◇学習内容の確認 ・特性、歴史の理解 ・活動の進め方 ・練習の仕方 ・健康、安全に関して ・禁止事項		◇礼法 ◇基本技能 (中段の構え、足さばき) ◇基本打ち(I・II) (面、小手、胴、足、突き)			◇交互打ち (面、胴、足)			◇グループ練習			◇グループ会議 (技術確認、作戦)	
30												◇グループ対抗戦	
40	◇学習の場づくり					◇護身打ち 〔扇打ち、掬い打ち〕 〔まわし打ち〕			◇グループ内対戦			アンケートの実施	
50			・整理運動(ストレッチ体操)			・学習内容の反省							

- ◎教師主導型の班別学習から指導を徐々にゆめ、リーダー中心のグループ学習へ。
- ◎グループ練習では不得意な技術を補うのではなく、良いところをのばす練習を。  
(その生徒の良いところをまわりから指摘し重点的に練習させる)
- ◎対戦では審判の判定よりも打たれたこと、負けたことを素直に認める《自覚》を重視する。
- ◎相手を思いやる気持ちを大切に(手を抜くことではない)

表1 イメージの単元前後の変化

		人数	単元前	単元後	性の主効果	測定時期の主効果	交互作用
否定的イメージ	男子	34	7.15 (2.95)	6.44 (2.65)	0.0003	2.53	0.00009
	女子	28	7.14 (2.32)	6.43 (2.53)			
肯定的イメージ	男子	30	16.50 (3.67)	19.43 (3.62)	1.25	29.25***	0.63
	女子	24	17.88 (3.39)	20.04 (4.08)			
武道的イメージ	男子	33	13.49 (3.73)	14.58 (2.82)	0.001	8.39**	0.46
	女子	27	13.19 (3.45)	14.93 (3.73)			

(\* P<.05, \*\* P<.01, \*\*\* P<.001)

と単元前後の2要因分散分析を行なった結果を示したものである。その結果、単元前後で、「肯定的イメージ」については0.1%水準で、「武道的イメージ」については1%水準で有意な向上が見られた。しかし、「否定的イメージ」では単元前後では若干低下している傾向がみられたが、その差は有意ではなかった。また、性差に関しては全ての因子で有意差はみられなかった。竹住ら<sup>12)</sup>の剣道実践では有意な変化が見られなかった「肯定的イメージ」が、有意に増加しており、スポーツチャンバラを行うことによって、片手でソフト竹刀を振ることができ、剣道よりも、動きやすく打ち合いの楽しさを味わえることから、「肯定的イメージ」が向上したと思われる。

竹住ら<sup>12)</sup>の研究では有意な向上がみられなかった「武道的イメージ」においても有意な向上がみられた。このことは、礼法や基本技能、基本打ちを単元前に習得させることでスポーツチャンバラを通して、「武道的イメージ」が高められることを実証している。スポーツチャンバラはあくまでもスポーツであり、武道の範疇に入れることに問題があるという指摘がある。しかし、学習内容として礼法や基本打ちを十分教えることによって、スポーツチャンバラによっても「武道的なイメージ」を感得させることが可能であることを示している。

「否定的イメージ」については、スポーツチャンバラの選択者は、単元前の段階からスポーツチャンバラに対して否定的なイメージは低く、有意な変化は見られなかったが、単元後に「否定的イメージ」の得点が低下する傾向がみられた。

#### 4.3. 単元前後の態度評価の変化

表2は、男女別の単元前後の態度評価の変化を明らかにするために、性と単元前後の2要因分散分析を行なった結果を示したものである。その結果、性差に関しては「わかる」において1%水準で有意な差がみられ、女子のほうが男子より得点が有意に高い傾向がみられたが、その他の因子に関しては有意な差はみられなかった。

単元前後の主効果に関しては、「まもる」で5%水準で、「わかる」で1%水準で、「できる」、「態度評価(合計)」では0.1%水準で単元後に有意に得点が向上する傾向がみられた。しかし、「たのしむ」では、単元前後で有意な差はみられなかった。「たのしむ」で5%水準で、「わかる」、「態度評価(合計)」では1%水準で交互作用が有意であった。男女別に単元前後でt検定を行った結果、男子においては、「たのしむ」で5%水準で、「わかる」、「態度評価(合計)」では0.1%水準で単元後に有意な高まりが見られたが、女子においては、有意な変化はみられなかった。

以上のように、男女ともに「できる」と「まもる」においては、単元を通して高まっていた。

表2 態度評価の単元前後の変化

		人数	単元前	単元後	性の主効果	測定時期の主効果	交互作用
わかる	男子	35	10.00 (1.80)	11.29 (2.05)	10.00**	9.66**	8.00**
	女子	29	11.86 (1.77)	11.86 (1.38)			
できる	男子	35	10.51 (2.37)	11.31 (2.22)	3.76	18.40**	0.42
	女子	29	9.55 (2.03)	10.14 (2.52)			
たのしむ	男子	35	11.51 (2.06)	12.20 (1.86)	0.50	1.83	5.44*
	女子	28	11.64 (2.20)	11.39 (2.13)			
まもる	男子	35	11.69 (1.88)	12.49 (1.63)	3.60	6.00*	2.20
	女子	29	12.79 (2.23)	12.97 (1.72)			
合計	男子	35	43.71 (5.54)	47.29 (5.18)	0.18	19.64***	11.74**
	女子	28	45.93 (5.46)	46.21 (6.26)			

交互作用のみられた態度評価の男女別の変化

しかし、「わかる」、「たのしむ」、「態度評価(合計)」においては、男子は有意に向上していたが、女子においては有意な高まりは見られなかった。

スポーツチャンバラを実施するに当たっては、男女混合のグループを編成し、グループ単位で活動する場

面を多く取り入れた。その中でも、グループ内の対抗戦やグループ対抗戦など試合を数多く行えるようにした。男子対女子の対戦では、女子にハンディをつけて、力のバランスをうまく調節したつもりであったが、女子がうまくポイントにつなげられる機会は少なかつたと思われる。このような運動能力や技能の差によって女子が満足する試合を行えなかつたことが、「わかる」、「たのしむ」、「態度評価(合計)」において女子の向上が見られなかつた原因であると考えられる。

		人数	単元前	t 値	単元後
わかる	男子	35	10.00 (1.80)	-3.90***	11.29 (2.05)
	女子	29	11.86 (1.77)	0.00	11.86 (1.38)
たのしむ	男子	35	11.51 (2.06)	-2.37*	12.20 (1.86)
	女子	28	11.64 (2.20)	0.94	11.39 (2.13)
合計	男子	35	43.71 (5.54)	-5.51***	47.29 (5.18)
	女子	28	45.93 (5.46)	-0.41	46.21 (6.26)

(\* P<.05, \*\* P<.01, \*\*\* P<.001)

#### 4.4. 単元前後の運動有能感の変化に関して

表3は、単元前後の運動有能感の変化を明らかにするために性と単元前後の2要因分散分析を行った結果を示したものである。性の主効果に関しては「受容感」のみにおいて5%水準で有意な差が見られ、女子が高い傾向がみられた。単元前後の主効果においても「受容感」において1%水準で、「運動有能感(合計)」では、単元後に5%水準で有意に高まる傾向がみられた。剣道の実践を行った竹住ら<sup>13)</sup>の研究では運動有能感に関して単元前後で全ての因子において殆ど変化がみられなかつた。このことから考えると今回取り組んだスポーツチャンバラは、運動有能感を高めるという視点からも有効であったと考えられる。

「受容感」と「運動有能感(合計)」が高まった原因としては、グループ内のメンバーが協力

体育授業におけるスポーツチャンバラの有効性の検討

表3 運動有能感の単元前後の変化

		人数	単元前	単元後	性の主効果	測定時期の主効果	交互作用
身体的有能さ の認知	男子	35	10.51 (3.41)	10.89 (3.83)	3.02	0.53	0.59
	女子	28	9.25 (3.03)	9.21 (3.59)			
統制感	男子	34	15.12 (3.78)	15.97 (3.61)	0.60	1.46	1.40
	女子	28	14.93 (3.42)	14.89 (3.25)			
受容感	男子	34	13.74 (2.59)	15.29 (3.48)	4.61*	11.32**	3.26
	女子	28	15.82 (3.16)	16.25 (2.82)			
有能感 (合計)	男子	33	39.21 (7.28)	40.03 (8.84)	0.04	5.79*	2.38
	女子	27	40.00 (7.68)	40.52 (7.80)			

(\* P<.05, \*\* P<.01, \*\*\* P<.001)

し合い、助け合って活動を進めていけるようにグループ活動を中心に授業を行ったことや、スポーツチャンバラの技術が型にはまったものではなく、それぞれの生徒が工夫できること、技術に関する教え合いが行いやすいものであったことが考えられる。しかし、「身体的有能さの認知」、「統制感」において、男子の得点に増加が見られたが、女子の得点は殆ど変化が見られなかった。このことは、スポーツチャンバラの技術は動きの速さが重要な要素であり、特に、試合時において女子が活躍できなかったことを示していると考えられる。そこで、次年度の実践ではなぎなた、長剣等の用具を準備し、性差の解消を試みる予定である。

## 5. まとめ

本研究は、1年生時に経験した剣道・ダンスの選択制授業に選択幅を持たせるために、スポーツチャンバラの種目を導入し、剣道よりも、打ち合いの楽しさをより重視した授業を実施し、その授業の有効性を、イメージ尺度、態度尺度、運動有能感尺度を用いて検討することを目的に行った。

スポーツチャンバラは全体の約半数の生徒が選択し、選択理由には、「楽しそう・面白そう」、「違う種目に挑戦してみたい」といった、積極的選択が多い傾向がみられた。また、竹刀に対する抵抗感や剣道よりも自由で気楽にできそうであるという理由から選択している生徒もおり、スポーツチャンバラを開設することによって、より多くの生徒の欲求を満たすことができたと考えられる。

スポーツチャンバラのイメージに関しては、男女ともに単元を通して好転しており、武道のイメージを好転することができたと考えられる。

態度評価に関しては、「できる」において男女ともに単元を通して得点有意に向上しており、ソフト竹刀を片手で振ることができ、打ち合いが容易にできることから「できる」という意識を誰もが感じることはできたのではないかと考えられる。しかし、「わかる」、「まもる」においては、男子は有意に向上しているが、女子は殆ど変化しなかった。

運動有能感においては、「受容感」は男女ともに単元を通して高まりが見られるが、「身体的有能さの認知」、「統制感」においては、有意な差は見られないものの、若干ではあるが男子は得点

が増加し、女子は得点が減少していた。

以上のようにスポーツチャンバラの取り組みは有効であったと判断できる。剣道・ダンスの選択制授業にスポーツチャンバラを取り入れることに関しては、武道という立場から多くの問題点が指摘される。しかし、一番懸念された武道的なイメージも男女ともに有意に向上しており、学習内容の工夫で問題を少なくすることが可能であることが明らかであった。態度評価、運動有能感の立場からもスポーツチャンバラの有効性は明らかであった。しかし、女子にとって本研究のスポーツチャンバラの取り組みは試合という面で男子との性差が解消しきれなかったと考えられ、今後はなぎなた、長剣などの用具を導入することによって、能力差を解消し、男女が一緒に楽しめるような工夫が必要であると考えられる。

## 文 献

- 1) 加地亜野・岡澤祥訓 剣道・ダンスの選択制授業に関する研究(4) 一体育授業における剣道・ダンスのイメージ尺度作成の試み一. 奈良体育学会発表論文集2 : 35-40 (1997).
- 2) 文部省 中学校指導書保健体育編 (1989).
- 3) 文部省 中学校指導要領 (1991).
- 4) 岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究16 (1) : 144 - 155 (1996).
- 5) 岡澤哲子・加地亜野 剣道・ダンスの選択制授業に関する研究(3) 一ダンスの種類に対する愛好的態度に及ぼす運動有能感の影響一. 奈良体育学会発表論文集1 : 47-52 (1996).
- 6) 岡澤祥訓 なぜ、有能感なのか. 体育科教育46 (6) : 70-72 (1998).
- 7) 岡澤祥訓・三上憲孝 体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係. 体育科教育46 (10) : 47-49 (1998).
- 8) 高田俊也・岡澤祥訓・高橋健夫・鐘ヶ江淳一 体育授業における新しい授業診断法の作成一特に小学校高学年を対象に一. 体育授業改善のための基礎的研究平成1・2年文部省科学研究費(総合研究A) 研究報告書 : 172-182 (1991).
- 9) 武井正子・石井千代江 男子学生のダンス学習に関する研究一ダンスに対するイメージの変容を通して一. 順天堂大学保健体育紀要33 : 54 - 62 (1990).
- 10) 武井正子・石井千代江 高等学校の男女共習のダンス学習に関する研究一体育科教員のダンスのイメージを通して一. 順天堂大学保健体育紀要37 : 9 - 17 (1995).
- 11) 竹住和宏・加地亜野・木村憲章 剣道・ダンスの選択制授業に関する研究(1) 一本校の意識調査一. 奈良体育学会発表論文集1 : 35-40 (1996).
- 12) 竹住和宏・木村憲章・加地亜野 剣道・ダンスの選択制授業に関する研究(5) 一剣道授業における単元前後の運動有能感・態度評価・剣道のイメージに関して一. 奈良体育学会発表論文集2 : 41-52 (1996).